



人類はひとつ 世界中に友情の橋をかけよう

MANKIND IS ONE - Build Bridges of Friendship Throughout the World



会長 中江 亮 幹事 佐藤元伸 副会長・クラブ奉仕 川村徳男 職業奉仕 嶺岸光吉 社会奉仕 山口篤之助 国際奉仕 黒谷正夫 青少年奉仕 津田晋介

出席報告：会員 70 名 出席 52 名 出席率 74.29% 前回出席率 72.86% 修正出席 62 名 確定出席率 88.57%

職業奉仕スピーチ

縫製業の現状について

石塚 敏彦 君



まず、第1番に現在のアパレル産業の台頭についてお話申し上げたいと思います。

アパレル産業とは、前回にも説明しましたが、衣服を企画し、製造し、販売する。3つの業務を行なう所と言われますが従来繊維産業の中の最も最終工程のごく小さな部分が、戦後急激に成長したところだと思えます。

戦前の繊維産業は一つの産業部門として、日本の産業を大きくリードする役目を果たしてきました。

即ち、昭和20年代は皆目わからないが、衣服は作れば売れる時代です。当時は学校の制服、或は国鉄の制服等はある程度既製服化されていましたが、一般男子及び女子用服は、町のテーラーと言われる仕立屋さんが、お客様の体型、寸法を測って服を作るというのが、20年代の実態だったと思えます。

しかし30年代に入ると、既製服化がある程度進んで、日本でもヨーロッパ、或はアメリカと同じ様に多くの人を使って量産の形をとって生産する対応が進められて来ました。

その後40年代に入り、仕立屋が工場を建設し、工場管理の態勢を取りながら、製造する段階に達した時、生産を維持する為に計画生産の必要が生じて来ました。即ち、市場を調査し、来年の流行を予測し流行を先取りした衣服を企画、生産が進められて来た訳です。この既製服の生産割合を婦人物スーツの指数で見ると、国際羊毛事務局の発表によれば40年頃には26%であったものが、55年代では90%にまで増加しました。

一方繊維産業には、川上・川中・川下という表現があります。これは40年代の後半から使われ始めた言葉ですが、川上は紡績、或は合繊メーカー等の糸を作る企業グループを指しているのに対し、川中は織物工場、編物工場或は染工場を指し、川下には縫製工場、そして百貨店、量販店、小売りに属する部門を取りまとめて言い表わしています。

当時この繊維産業は、斜陽産業と言われ始めた時で、その産業の最終工程の川下のグループが、流行

を先取りし、工場管理による量産態勢を整え、販売を促進することにより、大きな推進力を発揮するようになってきました。

つまり、繊維産業のリーダーは、川上のグループであったのが、何時の間にか、ずっと力のなかった川下グループと入れ変ってしまったのです。

この力の関係を販売価格の面から分析してみると前回の私のスピーチでも説明したのですが、ズボンの価格を10,000円として、その工程別コスト内容を表にすると次のようになります。

原反代	1,000 円	} 3,000 円	} 10,000 円
附属代	500 円		
縫製加工賃	1,000 円		
その他製造費	500 円		
流通費	7,000 円		

即ち、川上・川中の占める価格よりも、アパレル即ち流通費関係の占める力関係が如何に大きく相異なるかがわかります。この実態は、2月5日の近代縫製新聞にも私と同じ考え方が「紳士スーツのコストの構造」と題して、次の如く発表されています。

原料代	4%	} コスト 30%	} 100%
附属代	5%		
加工賃	21%		
流通費	70%		

即ち、昨年お話申し上げたコストの割合が誤りでなかったことになり。それだけに、斜陽産業と言われた繊維産業の中から、土地も工場も人も持たないアパレル関係者が大きく伸びてきた底力が秘められていると思えます。これは、見込み商品を作る時の大変なリスクを背負い乍らアパレル業者が、自分のブランドを開発し、或は輸入し、そのブランドの名の元に、積極的に売場を獲得してきた事。又、その売場の情報を収集し、来るべきシーズンへの流行を先取りし、流行にマッチした商品企画を立案、そして仕立屋の縫製工場を駆使し、既存の百貨店或は量販店、小売店の売場を活用した知識集約化の主導的役割を遂行して、斜陽産業を盛り上げてきたアパレル企業の面目躍如たるものがあると思えます。

全国勤労世帯の消費支出統計によれば、一世帯当りの費用の割合は、食料27%、住居4.5%、水道光熱費5.9%に対し被服は、7.3%に及んでいると言われます。アパレル産業の働らき方如何では、繊維産業は決して斜陽産業ではないと考えます。

庄内空港の建設を推進しましょう

ところで、その中で我々縫製工場の産業部門に占める位置は、ここ数年加工賃も変わらず、経費の増加は年々厳しくなる一方の現状です。人件費の増加に対し、縫製工場のコスト割れを乗り切る為、都会中心方の縫製工場は、少しでも秀れた人を集められる東北、九州そして四国の田舎にどんどん移設が進められている今日です。

鶴岡には現在26社約1,000名、酒田には30社約2,000名と、両市を合すると3,000名の従業員が従事する産業に成長しつつあります。しかも内職者を合すると、5,000名近い関係者が従事する産業であることがわかり頂けると思います。

しかし、これらは何れも企業力がなく、販売力もなく、勿論リスクを背負える企業ではありません。このコスト高に対する対応は、秀れた企画力を持つアパレルメーカーを旦那様と考え、御主人様の信頼を得ることが最も重要なポイントだと思います。

それには、納期を守り

品質を確保し

より安いコストで生産する。

そして作業方法、システム作りによる生産性向上できる対応を計ることが絶対必要かと思えます。作業方法の改善、機械の改善、システムの改善に当り、地場産業の皆様方のお力、或は知識をお借りする必要があります。その節は何分よろしくお力添えを賜りますようお願いし、スピーチをお終らせて頂きます。有難うございました。

会長報告

中江亮君

- 郵便でお知らせした通り鹿兒島西R.C.創立20周年記念式典慶祝訪問にご参加なさる方はお早めに事務局までお申込み下さい。日程表の通りですと5日間になりますので、交通公社で見直していただきまして3日間(3月24日～26日)の案もありますので、なるべく多勢のご参加をお願い致します。
- 次に台中港区R.C.の陳克己会長さんから、創立12周年記念式典のご招待状が参っております。時期は5月10日ですが、理事会で十分検討した上で、次週に皆様にお計りいたします。なお、クラブの国際親睦委員会から台中港区R.C.に日本のカレンダー45本をお送りしましたが、それに対してお礼のお言葉がありました。

幹事報告

佐藤元伸君

- 日中友好しんぶん「日本と中国」が到着
3-H報告書到着
- 奥羽千種会より研修会の案内到着
日時 昭和58年2月26～27日
場所 天童温泉 パーソナルホテル 紀の川
講師 村田善明氏(豊中R.C.)
会費 5,000円

希望者は事務局までお申し出下さい。

- 1983～84年度ロータリー手帳、ロータリー全国

会員名簿の注文書が到着しています。

- 鶴岡市民憲章パネルの頒布について
大型 5,000円 小型 3,000円
鶴岡市民憲章推進協議会
会長 安藤定助氏より
申し込みは鶴岡市役所まで

社会奉仕委員会

山口篤之助君

去る2月1日に親睦活動委員会主催のたら汁会において財団委員会と社会奉仕委員会共催で行ないましたオークションで64,800円、また現金で69,000円合計133,800円の高額の温い寄付を頂きました。今後両委員会で相談し有効に使わせていただきます。

情報委員会

小池繁治君

ロータリー規定審議会から提案されていた議案については本来クラブ全員で討議すべきことではありますが、物理的に無理があったので、情報委員会と会長・幹事で2月14日、時間をかけて審議しました。その結果などを報告します。

ロータリー規定審議会は3年に1回開催される会議です。我々が指針としているロータリーの綱領および定款、細則を3年に1回改正するところがあれば改正しようということで、各クラブに問いかけを行ない、これに対し各クラブから改正の提案がされるのですが、1983年度の規定審議会には188件の提案がありました。これに対し賛成か反対か保留かの意志決定をしなければなりません。各国から出た188件の内容は簡単なものからむづかしいものまでさまざまであり、日本からも6件ありました。この提案に対し鶴岡R.C.としては先に述べた通り審議した結果、賛成35、反対57、保留97で、保留が多くなりました。保留は代表委員に一任ということにもなります。253地区の代表委員は浜田耕一さん(米沢R.C.)です。モンテカルロで3月7日から3月10日まで開催される規定審議会に出席されて、クラブの意志を伝えることとなります。なお当クラブの審議した結果内容は、事務局にありますのでご覧下さい。ロータリーの綱領、定款、細則は上から与えられるものでなく、会員1人1人の、またクラブの意志が反映されているものであることをご認識いただきたいと存じます、したがって我々が我々の手で作った綱領であり定款であり細則である限り、ロータリアンとしてこれに添った判断、行動をとることは、課せられた義務でもあると思います。

米山奨学会委員会

菅原辰吉君

本日の例会において募金協力を要請した結果、10,707円の寄付がありました。

ビジター

鶴岡西R.C. 井上彬君 余目R.C. 佐藤孝二郎君
(今週の担当者 今野清一)